

日本学術会議 科学者委員会
学術誌問題検討分科会（第3回）議事要旨

1. 日 時： 平成24年6月22日（金）16：00～18：15
2. 場 所： 日本学術会議 5-A（1）会議室
3. 出席者： 浅島委員長、田口委員、嶋田委員、須田委員、北村委員、松岡委員、吉田委員、北里委員、植田委員、古田委員、谷藤委員、永井委員、林委員
（欠席：小松委員、辻村委員、矢野委員、長野委員、玉尾委員）
事務局：石原参事官 他
4. 配付資料： 資料1 前回議事要旨（案）
参考1 委員名簿
5. 議 事：
 - （1）前回議事要旨（案）の確認
原案通り了承された。
 - （2）副委員長、幹事の選出
浅島委員長より、副委員長に北里委員（第三部）、幹事に田口委員（第一部）、植田委員（連携会員）が指名され、分科会にて了承された。
 - （3）学術誌の現状の課題と問題点
浅島委員長より、第21期の当分科会の活動及び、文部科学省における科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会での検討を踏まえて、この秋から公募される「科学研究費補助金（研究成果公開促進費）」が変更されたことについて報告があった。
 - （4）オープンアクセス（OA）を巡る一つの試み
オブザーバーとして参加されたBio Med Central ディレクターのDeborah Kahn氏より、OAの現状と今後の在り方について報告があった。
 - （5）現状の日本の学術誌の刊行の問題点
学術誌の問題点について意見交換が行われた。また、オブザーバー参加された中西印刷株式会社（中西氏）及び小宮山印刷工業株式会社（小宮山氏）より、印刷会社側からの視点で学術情報発信について報告があった。
（主な意見は以下のとおり。）
 - ・大学図書館の立場からは、OAという方向性が強まっていることは基本的には歓迎できる。ただ実際は、個別の領域や分野によって内部事情が異なっている。これまで図書館は雑誌購読料を出版社に支払っていたが、OAを学術情報のシステムとして支えていく際に、図書館はどういった役割を担っていくべきか議論する必要がある。
 - ・図書館が代表して購入していたこれまでの方向性と、研究者達が自ら負担して世界の人に見てもらおうこと、この2つの間には大きな溝がある。溝を埋めるのはおそらくま

だ時間がかかる。一流誌と呼ばれるジャーナルがOA化しないと、図書館自体の経営が成り立たない。OAの問題は、図書館がどうするかではなく、研究者自身が自分たちの学術情報流通基盤を支える方向に行くかどうかが重要である。

- 物材機構では論文誌を購読モデルからOAモデルに変えたが、投稿数は増えたもののクオリティがあがったわけではないと実感している。また、OAが自由な学術情報流通に貢献するかどうかは、編集者の努力と商業出版に代わるボーダーレスなジャーナルへの研究者コミュニティの支持が必要である。
- OAにしたからインパクトファクターが上がるということではない。投稿数が増えたとしても、研究者にとって最も良い論文が投稿されているか分からない。ブランド力のある雑誌を研究者自身が支持してしまうのではないか。
- ジャーナルの編集部が顧客調査をすべきではないか。現状はジャーナルに投稿した人がどう感じたか、調査して次の編集に活かしているかという対応できていないのではないか。編集を支える体制も必要である。
- 日本から優れた国際誌を出すにはどうしたらいいかという議論になっているが、日本人は日本人の論文を引用しないということが統計上出ている。外来文化に頼るという日本人の傾向がある。雑誌のインパクトファクターを上げてみるのも一つの手ではないか。日本人はブランドを支持するので、良い投稿も出てくるのではないか。
- 分野によって定期的な購読者がどれくらいいるのか最初に大きく分類してはどうか。千人程度と何十万人とでは話が違う。議論の前にフォーカスを決めていくべき。
- 前期の提言を受けて文部科学省の科学技術・学術審議会でも検討されたことで、国際性やOAを踏まえた「科学研究費補助金（研究成果公開促進費）」の変化が起きた。今後、更にバージョンアップしていくためにも審議を深める必要がある。
- 今回の科研費（研究成果公開促進費）は国際性を重視しているが、最初から必要なのだろうか。国際性と質はつながらない。日本人だけが良いものを載せたジャーナルでもいいのではないか。良い雑誌であれば、国際性は後から上がってくるのではないか。
- 日本のジャーナルは学会ベースで発行しているが、OAになると学会という単位ではなく個人に変わることになる。学会というソサイエティは何でつながっていくのか、小さな学会ほど存続に関わる話になる。
- 今回の科研費は、日本のジャーナルをどうするか学会が真剣に考えるチャンスである。各学会が将来的にどのようなジャーナルを目指すのか、あるいは国際的に発信していけるようなことをするのか、インパクトファクターを上げるのも一つの手。ソサイエティの大小もあるので、各学会で考えて選択してもらうことになる。
- OA化した際に、それを支える体制として編集者のプロが必要なのではないか。外国のパッケージに頼っているだけでは、何年経っても自分たちに新しく身につくものがないのではないか。サポートするシステムを検討していく必要がある。
- 分野によるが小さなジャーナルはJ-STAGEなどに掲載することでフリーアクセスができるようにしている。そういった分野があることも考慮する必要がある。
- 支援体制を考える上で、分野における客観的な基盤があるかどうかを個別に見ていく必要がある。各学会の歴史や運営の仕方によってそれぞれ違ってくるのは事実である。

6. その他：

今回は8月28日（火）16：00－18：00に開催することとなった。

以上